

新薬続々 命つなぐ希望

「それを『オンラインコロジ』・タイムマシンって、言うんですよ」

昨年12月、福岡市で開かれた日本肺癌学会を取材で訪れた際、近畿大呼吸器科特任教授の光富徹哉さんが言つた。

「がん治療のタイムマシン？」と問う私に、光富さんの説明が続く。

がんの薬は、最初はよく効いても続けるうちに耐性ができる。効かなくなることが多い。だが、最近は開発が進み、画期的な新薬が続々と登場している。そういふた薬を使えば、タイムマシンで治療を始めた頃に戻ったかのように高い効果が期待できる。また効かなくなつても次の新薬を使う。その繰り返しで寿命までいければ……。

それはまさに、私が乳がんの診断を受けた20年前に患者仲間と語り合つた「願



自身の闘病経験から、がん患者支援に特化した社会保険労務士事務所「Cancer Work - Life Balance」を運営する清水さん

状があると怖くて……」
すぐに放射線治療を始めたが、何度も脳転移を繰り返し、そのたびに放射線でたたいた。ただ、脳以外に転移は見られず、医師は経過観察を提案した。一方、

「い」であり「希望」だ。今はまだ再発転移したがんの完治は難しい。ただ、一握りではあるが、治療を続ける中で自分にビシッと合う新薬が登場し、命をつなぐ経験をする人も出てきた。

35歳の時に肺がんが見つかった千葉県の清水公一さんは(45)も、その一人。「運良く生きることができるいい自分のだから、がんと闘う患者・家族が自分らしく生きるためにサポートをしたい」と、現在、がん患者支援に特化した社会保険労務士事務所を運営している。

清水さんは2012年10月、長男が誕生した3か月後に肺がんと診断された。一方、入社前の健康診断で指摘されたのがきっかけだ。幸い初期で、手術を終えて翌年3月に無事入社した。しかし、その後、副腎に転移が見つかり、再び手術。10月には、右手足に力が入らなくなり、受診すると脳に3ヶ所ほどの腫瘍が見つかった。脳転移だった。

清水さんは2012年10月、長男が誕生した3か月後に肺がんと診断された。一方、入社前の健康診断で指摘されたのがきっかけだ。幸い初期で、手術を終えて翌年3月に無事入社した。しかし、その後、副腎に転移が見つかり、再び手術。10月には、右手足に力が入らなくなり、受診すると脳に3ヶ所ほどの腫瘍が見つかった。脳転移だった。

清水さんは2012年10月、長男が誕生した3か月後に肺がんと診断された。一方、入社前の健康診断で指摘されたのがきっかけだ。幸い初期で、手術を終えて翌年3月に無事入社した。しかし、その後、副腎に転移が見つかり、再び手術。10月には、右手足に力が入らなくなり、受診すると脳に3ヶ所ほどの腫瘍が見つかった。脳転移だった。

清水さんは2012年10月、長男が誕生した3か月後に肺がんと診断された。一方、入社前の健康診断で指摘されたのがきっかけだ。幸い初期で、手術を終えて翌年3月に無事入社した。しかし、その後、副腎に転移が見つかり、再び手術。10月には、右手足に力が入らなくなり、受診すると脳に3ヶ所ほどの腫瘍が見つかった。脳転移だった。

ところが、治療を始めて3年ほどした16年秋頃、脳転移が悪化。さらに12月には、脳や脊髄を包む髄膜にがんが広がり、がん性髄膜炎を発症した。

「涙をためて赤い目をした医師に『非常に厳しい状況です。残された時間を大切にしてください』と言われ、楽観的な私も、さすがに死を覚悟しました」

医療ルネサンス

No.7946

がんと私 20年 サバイバーシップ

5/5

「わが、死を覚悟するしかないのか」

千葉県の清水公一さん(49)は2016年12月、肺がんの脳転移に

加え、がん性髄膜炎を発症した。

経過の見通しが悪いケースが多いと知り、残された時間を考え始めた時、医師が提案した。

「新薬の『オプジーボ』をやってみましょう」

オプジーボは、免疫チェックポイント阻害薬と呼ばれるタイプの薬で、患者の免疫細胞の攻撃力を高めてがんを治療する。肺がんには前年に保険適用されたばかりで「効く人にはよく効くが、どんな人に効くかまだ分からない」と説明を受けたが、清水さんは「他に選択肢はない」と決断した。点滴治療を始めて2か月後、脳



自身の闘病経験から、がん治療と仕事の両立の課題などについて講演する清水さん(昨年12月、日本肺癌学会で)

もられた命役立てたい

や髄膜に広がったがんが検査画像にほとんど写らなくなり、腫瘍マーカーも基準値内に下がった。

「ひょっとしたら、生きられるかも知れない」

医師には「ここまで劇的に効くのは、まれなケース」だと言われた。口内炎や発疹など副作用には悩まされたものの、1年ほど治療を続けて薬を休止。唯一残つたり

ンパ節転移を放射線治療でたたき、18年2月から経過観察となつた。以来、検査でがんが見えない寛解状態が5年近く続いている。

がんの薬物治療に詳しい近畿大腫瘍内科教授の中川和彦さんは、「オプジーボなどの免疫チェックポイント阻害薬では、患者の2割程度に腫瘍縮小などの効果がみられ、5年以上も長く効いている例

が出てきている」と説明する。

裏を返せば8割の人には効果がないと言え、強い副作用で治療が続けられない人もいる。

だが、中川さんは「他にも、

この十数年、がんに関わる遺伝子変異の解明が進み、分子標的薬も次々と開発されている。そのスピードは目を見張るものがある」と指摘。「次は自分に合う薬が出てくるかもと希望が持てる時代になってしまった」と期待を込める。

検査画像からがんが消えていくうちに「生きられるという妙な確信を持った」と清水さん。最初のがん治療を始める前に精子の凍結保存をしていたことを思い出した。妻(40)に2人目を提案し、17年11月に次男が誕生した。「夫婦で子どもは2人欲しいと話していたので。頑張って働かなきゃ」と、気持ちも切り替わった」と笑う。

会社の休職期間を使い果たし、退職してから、社会保険労務士の資格を2回目の挑戦で取得。20年に、がん患者や家族の支援に特化した社労士事務所「Cancer Work-Life Balance」を開業した。

清水さん自身、治療と仕事の両立に苦労し、経済的不安を抱えた闘病生活だった。患者会仲間に教えられ、障害年金を受給して生活を支えてもらつた経験もある。

「せっかくもられた命だから、自分と同じような悩みを抱えている患者、家族の役に立ちたい」

(編集委員 本田麻由美)
(次は「肺臓がん」です)